保育科学学生へのピアノ指導法の基礎研究（3）
—運指法における「安定性」と「安全性」について—
○三宅義和
岩口英子
（関西学院大学）（南海福祉専門学校）

1. 目的
保育者が保育室におけるピアノ指導は、あまり効率的に機能していないという従来からの批判的観点に立って、我々は運指法を発展させる指導の可能性を模索してきた。関連しないで弾くためには、そのフレーズに対する合理的な指使いを用いることが重要である。合理的な指使いとは多くの場合複数存在しているが、そのうちどのパターンを選択するか、弾き手のレベル、技術、手指の構造、心理的要因などに依存するとと思われる。合理的な指使いのパターンが複数あると考えられる中、これらをよく検討してみるとその合理性について一定の法則あるもののように思える。そのような法則あるもののか、このような見地から、指使いのあり方を「安定性」、「安全性」、「音楽性」という概念を使って整理してみると、「音楽性」を重視した指使いの説明は紙面の関係を省略する。

「安定性」を重視した指使いとは、手の静止を第一条件にし、そのままの手のフォームを崩さないで弾くことを目的とし、手がとるべき自然なポジションのままでの指使いのことである。F.F.ショパンが案出した指使いとも言われているが、H.カニ（1987）も「手のポジションをできるだけ変えないようにする良い指使い」、「手をその基準とした位置から動かないでしまうことに」が良いとして、このような考え方を支持している。実際に手が安定としてレベルにまで達すると「安定性」を重視した指使いの方が、心理的安全感が強く得られ、より安全に弾けることが春よと理解されることになる。きめ細かな指を少なく質的な指使いであり、フレーズをワンポジションあるいはワンポジション的に弾くことができる。この場合、弾き手に必要とされる要素は、各指の独立感（特に第3指、第4指、第5指）、各指間での指広げ、親指の脱力などであることは言うまでもない。

次は「安全性」を重視した指使いである。手の合理性を犠牲にしても、第4指、第5指よりも第1指、第2指、第3指を優先的に用いるような指使いの一つである。具体的には、指回し及び指ぐるみの技術が必要であるとされている。第1指、第2指、第3指（第4指）が頻繁に用いられるような運指法となる。これについては心理的面と技術的な面について言及されなければならない。

この指使いの習得のため、特に第4指、第5指が動かずに、フレーズを間違われずに弾こうとした場合、これらの指よりも第1指、第2指、第3指をより多く用いる傾向が見られる。また、ある程度のプレイのバグタッチができる状態であるならば、指回し及び指ぐるみを中心とした指使いは、技術的に安全であることを保証するものである。実際に、このような根拠のもとに、伝統的なピアノ学習教材においては、ハイエール→プリュム→ソナタ→ソナタという順で配列されてきて、が手安定するまで、指回しあるいは指ぐるみの技術を身につけることは演奏時の安全性を増すための重要な手段である。

前回までの研究によると、合理的な指使いを選択させる要因として、学習者のレベル（進度）あるいは学習経験年数が若干関係していた。そこで本研究は、「安定性」、「安全性」という二つの概念をより明確にするために、保育科学学生を母集団として考察を加え、さらに、学習者のレベルとの関係についても探っていくことを目的とする。

2. 方法
質問紙作法である。被験者は兵庫県の某地区と大阪府の某地区より抽出された女子74名。実施年月は平成10年12月で集合調査によって行われた。質問紙の構成は個人の属性を問うウェネムートの部分と、各音における運指パターンについての回答を問う部分から成り立っている。

使用した音列（以下運指モデルと呼ぶ）は、C音から上方に向かって（6度から8度の範囲で）順に構成される5つの音である。理論的には数十通の運指モデルが考えられるが、6度内のものを4つ、7度内のものを2つ、8度内のものを2つと計9個選び出した。これらの運指モデルにおける音構成は、シフトされたものを含めて幼児歌曲では非常によく見られるものである。これらのモデルに対して「安定性」を重視した運指パターン（記号a）と「安全性」を重視した運指パターン（記号b,c,d）を配列した。運指モデルを1～9の丸番号で、運指パターンをa,b,c,dなどに分類し、各音に対する応答した運指パターンは合計
で30個となった。（表1参照）。これらの一ひとつについて、その選例を示すような指使で強調したり、どの程度の安心感をもって弾けるのかを4件法で記入させた。
この4件法は「この指使で、充分安心して弾ける」を1点、「この指使で一応弾けるが、安全に弾くには少し不安が残るようだ」を2点、「この指使で弾けなくとも、間違いの可能性が高いように思う」を3点、「この指使ではとても弾けそうにない（おそらく間違うであろう）」を4点とした。

3. 結果と考察

各運指モーダルに対応する各運指パターーンごとの、全体及びレベル別の平均値が表1に示されている。各運指モーダル(10個)に対して、「安定性0(a)」と「安定性b,c,dのうちの最良のものが」、どちらがよりよいのかを全体の平均値から概観すると、モーダル①④で「安定性0」＞「安定性b」（対応のあるt検定でp<0.05）、モーダル②⑤⑥で「安定性0」＝「安定性b」、モーダル⑦⑧⑨で「安定性0」＞「安定性b」となった（対応のあるt検定でp<0.05）。
これまで6度曲における、第1指第2指間、次に第4指第5指間の指間のproximity価と、8度曲においては指ぐるみや指同士を用いた方が好まれていることを示すものである。次に、「安定性」を重視した運指パターーン（記号aがついたもの）の平均値に注目して、各モーダルの順位を表したものが表2であり、全体と各レベル毎の順位を比数てみてもあまり変動はない。つまり、ピアノのレベルが上がったとしても指間を広げる方針はある程度解見ていることがうかがえる（第1指第2指間＞第1指第5指間＞第2指第3指間＞第1指第2指間+第4指第5指間・・・）。また、同様にして「安定性」を重視した運指パターーン（記号b,c,dの平均値に注目して、各モーダルの順位を表したものが表3である。これらは、全体と各レベル毎の順位を比数でみるとかなり異なっていることがわかる。全体では、第3指→第1指→第1指→第4指→第1指の順に順位が落ちており、第4指→第1指の順に練習の変化、個々の実力のあり方がうかがえるようになった。また、バイエル群ではとくに第3指から第1指の顺があり、かつ7度音程をワン位置的にとらえる傾向を避けるのにに対し、ソナタ群では第2指→第1指の順をワン位置的な使い方を好むようであった。

参考文献：
H. カン『ピアノ演奏おばえがき』音楽之友社、1987年